

臨時

2011.5.10

増刊号

全子連NEWS

社団法人 全国子ども会連合会 〒112-0012 東京都文京区大塚6-1-14 全国子ども会ビル3階
TEL 03-5319-1741(代) FAX 03-5319-1744 事業開発部注文専用FAX 0120-886-415
URL <http://www.kodomo-kai.or.jp> E-MAIL info@kodomo-kai.or.jp

東北地方太平洋沖地震の被災地視察を行い

このたびの震災により、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

あの大地震から一ヶ月。岩手、宮城と震災の被害の大きい地域を見て回りました。テレビやインターネット、新聞等のメディアで被害の状況は知っていましたが、いざその被害を目の当たりにすると言葉が出なくなりました。

家が崩れ瓦礫の山となり、海岸の船が陸地に乗り上げ、道路はひび割れて車を走らせるのも一苦労な状況。そこで生活していた人のありとあらゆるものが壊されている状況は何とも言葉に表せません。一ヶ月たった今でも、被災者の方々は大変な生活を過ごされていました。

現地の子ども会役員の方々や地域の方々のお話を色々お伺いしました。同じ小学校内でも被災した子どもとそうでない子どもがいること。生活の立て直しの目途が全く立たず、子ども会活動の再開も難しい事。ジュニア・リーダーのお兄さんお姉さんとのふれあいが、子どもたちの心の安らぎに繋がっている事。被災地の現状を聴き、10年単位の長いスパンで物心共に支援していくことが大切であると、改めて感じました。

全国の皆様からの救援募金も沢山集まっています。心から感謝申し上げます。また、ジュニア・リーダー達が駅前立ち、被災地の子ども会の仲間の為に募金活動を行ったという話も聞きました。助け合い、思いやりの心を子ども会で育ててきた子どもたちの善意が、行動として表れています。大変嬉しくありがたい事です。

皆様からお預かりした救援募金は、被災地の県市子連を通じて復興支援の為に義捐金として、子どもたちの心のケアの為に費用として活用させて頂く予定です。引き続きご協力をお願い申し上げます。

最後に、宮古市の鯉ヶ崎小学校をはじめとして、被災各地で遊びまわる子どもたちの姿を見かけました。このような状況の中でも、元気に仲良く遊ぶ光景は忘れられません。どんなに大きな被害にあおうとも、彼らの目は明日を向いています。この子どもたちに自分は、自分たちは何ができるのか。改めて考えさせられました。

今後とも全国子ども会連合会は全力で今回の震災に取り組み、被災した方々の為、子どもたちの為に活動を展開していきます。

皆様のお力添えをこれからもよろしく願い申し上げます。

社団法人全国子ども会連合会 会長 丸山康昭



-被災地を視察する丸山会長と気仙沼市子連 熊谷会長(左)-

震災地視察報告 -社団法人全国子ども会連合会 常務理事 吉寄 三義-

4月12日から13日にかけて、岩手県子連と宮城県子連の役員の方々の案内で、被災地を視察した。目的は、全子連として被災地に対して何が出来るか、被災地の子ども会は何をもとめているかを探ることにあった。視察に加わったのは、丸山会長、常務理事、職員の小菅と穂山だった。

初日は、岩手県子連の三浦事務局長、主濱常任理事、小赤沢常任理事のご案内で宮古市を訪ね、その後、被災した沿岸各地を視察した。宮古市では、市役所で副市長に面会し市立鯉ヶ崎小学校では、校長先生にお目にかかって話を伺った。

二日目は、宮城県子連の菅原会長、公平副会長、香月事務局長のご案内で県内の被災地を回った後、石巻市役所教育委員会を訪ねた。

目次

●東北地方太平洋沖地震の被災地視察を行い	1
●震災地視察報告	2

次頁へ続く

1. 宮古市の鵜ヶ崎小学校は、高台にある児童数約240名の学校であるが、親を亡くした児童が1人いた。この日にはまだ入学式は行われておらず、教室と体育館は周辺地域の避難所になっていた。また、学区外へ転校した児童が5～6人。

校長先生のお話

「この学区は、被災地区と山の手地区からなっており、山の手は何もなかった。さいわい学校で命を落とした児童はいなかったが、被害を受けた家庭の児童と何らかの形で免れた児童では、気持ちのギャップ・温度差があつて、今後どのように対応していくか大きな課題であり悩みであり、今は何も考えられない。」

「家をなくした親、仕事をなくした親。親の落ち込んだ姿を見なければならない子どもたちに、どうやって声をかけていくのか」

宮古市役所では、山口副市長に面会した。丸山会長は「心のケア、全子連には専門家もいるのでできるだけお手伝いしたい」と話したが、副市長は「落ち着くまで、今は復興するまでということしか言えない」ということであつた。

被害の大小による温度差、それは多様な地域と経験をかかえる全子連・子ども会の課題でもある。わたしたちは、わがこととしてどのように共有していくのか。「子どもたちは今はなかなかひとつの気持ちになれないが、高校生ボランティアのお兄さんやお姉さんとあつと心が和むようです」(狩屋宮古市子連会長の話)。地域の中でのコミュニケーションの大事さを示唆する言葉であつた。



—宮古市鵜ヶ崎小学校にて—

2. 石巻市には、三分の二が犠牲になつた大川小学校がある。この日、市教育委員会は教育長を初めとして多くの職員がまだ確認のできていない児童をさがすために出払つていた。わたしたちは、市役所近くの高台から立ち入り禁止になっているこの小学校を眺めることしかできなかった。

前日に通過する車の中から見た釜石市の防災教育のことを思い出した。「釜石の子守つた防災教育小中学校全員無事」(5月11日 産経新聞)によれば、釜石市の徹底した防災教育と小中学生が知恵を働かせて全員無事だった様子を伝えている。

安全と安心を柱とし、安全教育と危険予知訓練を主要な目的とする子ども会・全子連がどのように安全教育に取り組むのか、大きな課題を投げかけている。

3. 道路には亀裂(というよりも小川のような状態になっていた)が入り、船が屋根の上に乗上げてある光景を見ながら、気仙沼市子連会長の熊谷氏と話した。

熊谷会長「地域は壊滅状態、子ども会活動も壊滅状態。生活を立て直すまでは、何をしてもいいかわからない。長いスパンで考えなければならない。長い目で支援をお願いします」

—長いスパンとは、どのくらいの期間ですか？

熊谷会長「50年かなあ。50年前にも、この地に津波があつた。50年後、子どもたちにどんな生活が待っていることか。」

4. 子ども会の会長は、その地域で他の役員をしている例も多いから、総合的な話を伺うことにもなる。復興の希望は、(災害対策のこともあつた)この地域で暮らすこと、仕事があること。

宮古市の魚市場で、震災後はじめて水揚げがあつたのは、わたしたちが訪ねた12日のことであつた。漁業者だけでなく、地域の人たちの喜びと希望であつたと聞いた。被災を免れた高台の農家の方々が産直の市を開くと、「待っていたよ」と久しぶりに元気なあいさつの交換があつたようだ。

道路や土地や仕事を住民の生活インフラ(基盤)とするなら、子どもにとってのインフラとは何か。被災地の関係者でも難しい課題をわたしたちは背負う。

同行した職員の小菅は、人々ががれきの中に思い出になるものを探す姿と、アルバムを洗浄して被災者に戻す活動をしているグループがあることという情報を重ねて、自分でもボランティア活動を始めた。



子どもたちからのメッセージボールを手渡す丸山会長と受け取る宮城県子連亀山専門指導員(左)

未曾有の災害であつた。わたしたちも、「未曾有」の対策が必要であらう。

まずもって、全子連にプールしてあつた災害義援金の約60万円を岩手県子連に送った。その後の救援には、資金も必要だし、心のケアも必要である。「長いスパンで...」、私たちが会った誰の口からも聞いた言葉であつた。

どうやって救援していくか、共有していくか。長いスパンで対応していくことを前提にして、皆様からのご意見を伺いたい。

その後、気仙沼の会長からは、東京都立川市の子ども会からトラック2台分の物資の救援があつたと報告があつた。大阪府の吹田市子連からは、子どもたちが鯉のぼりをつくつたのだがどこへ連絡したらよいかとの電話をいただいた。他の義援金と区別するために、「子ども会を通して子ども会の子どもたちに届けられるのですね」という確認の電話もあつた。その他、全子連の救援募金口座に、現在約300万円の義援金が振り込まれている。引き続き救援募金活動を継続していきますので、皆様もご協力の程宜しくお願い申し上げます。